

「戦時下における児童文化」について（その一五）

―「少国民新聞」（東日版）における読者投稿作品の位相と展開（三）―

熊 木 哲

「少国民新聞」（東日版・東京日日新聞社発行）は、「東日小学生新聞」の改題であるが、「小学校が明春から国民学校となるので、それに応じてわが東日小学生新聞も『少国民新聞』と改題することになりました」（「東日小学生新聞」昭和十五年十二月十二日）というもので、「尋常小学校」が「国民学校」になるのは、昭和十六年四月からであったが、「東日小学生新聞」は、十六年元旦から改題し「少国民新聞」（東日版）（以下、「少国民新聞」と記載）となった。

前稿〈戦時下における児童文化〉について（その二四）（「大妻女子大学紀要・文系」第四十一号、平成二十一年（二〇〇九）三月）では、「少国民新聞」の昭和十六年に掲載された「俳句」を検討した。以下、本稿では、「少国民新聞」に掲載された、昭和十六年の「詩」を四半期毎に検討する。

引用に際しては、原則として、旧字体を新字体に改め、改行も適宜改めた。

前稿同様、作者については、在籍校名・在学年・性別を記すにとどめた。在学年次のうち「高一」「高二」は高等科一年、二年を示す。

「戦時下における児童文化」について（その一五）

一 昭和十六年の「詩」作品の展開

前稿でも記したが、「少国民新聞」に改題された昭和十六年には、「東日小学生新聞」では設定されていた「紙上作品展覧会」あるいは「紙上作品展」の紙面構成は、見られなかった。

昭和十六年の検討対象は、前稿同様、一月一日（水・第一三三三三三）から十二月三十一日（水・第一六四一四一）までの、休刊日を除いた三〇九日分であるが、国会図書館蔵「少国民新聞」は、一月二十二日（水・第一三四九九）のマイクロフィルムが「欠」であり、検討対象は三〇八日分であった。

この間の掲載状態は、原則として、「東日小学生新聞」と同様、毎週月曜日が休刊日であり、火曜日から日曜日まで、「綴方」「詩」「短歌」「俳句」「書方」「図画」の総てか、或いは、その一部が掲載されていた。

紙面構成も、「東日小学生新聞」と同様、平日・土曜日が四面、日曜日が八面構成であったが、第四四半期になると、「お国への御奉公」（「少国民新聞」十月七日）のため、用紙を節約するところとなり、十

月九日から週一回(木)、十一月五日から週二回(水・金)、十二月九日からは週三回(火・木・土)が二面構成となった。二面構成では十五日分で作品の掲載は無かった。

以上、前々稿、昭和十六年の「綴方」及び前稿「俳句」に記載した作品の紙面掲載状況であり、本稿においても、その状況に変わりはない。

昭和十六年、「詩」の掲載数は三四八作品。

内訳は、第一四半期が九六作品。

第二四半期が八二作品。

第三四半期が九八作品。

第四四半期が七二作品。

昭和十六年に掲載された「詩」三四八作品のうち、作品内容に「戦時下」色に見えるのは三一作品(約八・九%)。

内訳は、第一四半期では九六作品中 六(約 六・三%)。

第二四半期では八二作品中 九(約一・〇%)。

第三四半期では九八作品中一〇(約一・〇・二%)。

第四四半期では七二作品中 六(約 八・三%)。

因みに、「東日小学生新聞」の発行された昭和十二年から十六年における「詩」作品の内容に「戦時下」色或は時局柄を内容とする作品は、次のようになる。

昭和十二年は、二六二作品中一〇(約 三・八%)

昭和十三年は、三六三作品中三一(約 八・五%)

昭和十四年は、三四一作品中三七(約一・〇・九%)。

昭和十五年は、三四八作品中三九(約一・二%)。

昭和十六年は、三四八作品中三一(約 八・九%)。

十六年の「詩」は、掲載数が前年十五年と同じであったが、「戦時下」を内容とする作品の掲載数は八作品減少し、当然のこと、掲載作品に対する「戦時下」を内容とする作品の掲載率も約二・三%の減少であった。

しかし、第四四半期の用紙節約による二面構成日では、十五日分で作品の掲載が無かったにも係わらず、掲載数が減少することがなかったということは、相対的に掲載数は増加傾向にあったといえよう。

一方、「戦時下」を内容とする作品の掲載率が減少したということは、「綴方」が三〇・七%と十五年を二〇%以上も増大し、「俳句」が約一・二%とほぼ同率であったことを考え合わせると、「詩」作品における減少傾向は特徴的であったといえよう。

なお、十六年一年間に、複数の「詩」作品が掲載された児童は、最多の一二作品が一名、次の九作品が一名、六作品が二名、五作品が三名、四作品が六名、三作品が五名、二作品が二四名であった。

以下、四半期毎に検討するが、都合上、内容に「戦時下」色に見える作品に第一四半期から第四四半期まで整理番号を付す。

二 昭和十六年第一四半期における「詩」

第一四半期(一月〜三月)に掲載された「詩」は九六作品。この内、作品内容に「戦時下」色に見えるのは、次の六作品であり、掲載作品に占める掲載率は約六・三%となる。

- 1 「遺骨迎へ」
(秋田県醒醐校六年男子、一月十七日・金、第一三四五号)
- 2 「模型飛行機」
(東京市大森区東調布第二校五年男子、一月十九日・日、第一三四七号)
- 3 「雪の夜」
(埼玉県用土校六年女子、一月二十三日・木、第一三五〇号)
- 4 「地下鉄道」
(東京市大森区東調布第二校五年男子、二月十五日・土、第一三七〇号)
- 5 「あゆみ」
(秋田県能代市向能代校六年女子、二月十六日・日、第一三七一号)

6 「雨」(東京市芝区南海校三年男子、三月十九日・水、第一三九七号)

1 「遺骨迎へ」(秋田県醍醐校六年男子、一月十七日)は、次のような作品。

黒いぬので、
竿をおぼつた旗が、
皆のいへの
門口に立つて居る。
旗が力なく、
ゆれて居る。

旗を立てて
列が静かに
進んで来た。

先生のおこゑが、
しんみりと
ひびいた。

戦死者の遺骨が帰ってきたので、出迎えに動員された児童がその様子を作品化したものであり、「遺骨迎へ」の事情がよくわかる作品である。半旗の日の丸は、竿に黒い布を巻いて、沿道の家々の門口に立てる決まりであったのであろう。児童は一列になって待たされ、遺骨が差し掛かると引率の教員の掛け声で黙祷をすることになっていたということである。

戦没者と作者である児童とは、同じ学校区ということであろうが、「遺骨迎へ」は、児童に課せられた一つの役割であり、教師の引率のもとと参列させられていたということである。

「力なくゆれている」半旗、静かに進む遺骨の列、「しんみりとひびいた」先生の号令。出征の見送りとは反対の光景を、作者は的確に表現して見せた。

2 「模型飛行機」(東京市大森区東調布第二校五年男子、一月十九

「戦時下における児童文化」について(その一五)

日)は、次のような作品。

できた〜、模型飛行機。
あした多摩川に 飛行機を
とばしにいかう。

さあ、ついた。
自転車を こゝへおかう。
さあ飛行機を、とばさう。
とんだ〜、ちうがへりだ。
よくとぶね、海軍戦とう機だ。

この作品における戦時下色は、「海軍戦とう機だ」の一節。自分で組立てた模型飛行機がよく飛んだことからの喩えであろうが、この喩えの一節のみが時局柄ではなく、模型飛行機そのものが時局柄なのである。

この作品が掲載された「少国民新聞」(第一三四七号)の第二面には、次の記事が掲載されていた。

佐原の模型機講習

わが社後援で作方指導

千葉県佐原中学校で今十九日朝九時から、模型飛行機製作講習会が開かれます。大日本飛行協会同県支部と、県下中等学校体育協会の主催、わが社後援で、東日大毎A一型と、国際規格G一型の優秀模型機の作り方を実地指導します。材料は伊藤飛行機株式会社社長の寄贈で、講師は県下学校滑空連盟副会長奈良原三次男爵、同評議員野口一等飛行士をはじめ、わが社航空研究部から原部長と浅海部員が出張します。講習は香取郡下の小学校先生方や高学年児童をはじめ、佐原中学の職員生徒など約百名であります。

模型飛行機の普及のための講習会であるが、一ヵ月後の二月十八日(第一三二二号二面)には、「空一ぱいに飛んだ東日A一型機の群れ 豊島園の学童模型機大会」の記事が、空に向かって模型飛行機を飛ばす児童の写真と共に掲載された。「豊島園主催、少国民新聞並に大日

本飛行少年団後援の、「第一回学童模型機競技大会」の模様を知らせる記事で、「十五校の尋四以上の生徒二百十名で、少女選手もまじり大張切でした」と記された。

同じ紙面には、「目黒高等の作品展に模型機がズラリ」のリードで、模型飛行機の展覧会の記事を載せ、ここには「東日一型機をはじめ、重爆や戦闘機も、本物そっくりの機体」が陳列されていたとある。

作品「模型飛行機」の背景には、こうした児童の模型飛行機への関心の高さがあったということになるが、模型飛行機を作り、飛ばせるのは、遊戯や娯楽ではなかった。「豊島園の学童模型機大会」の記事には、模型機が空を飛ぶ様子を見守る児童の姿を、「小さい飛行技師たちの眼は、明日の航空日本を担ふ意気込で輝いてるました」の一節が見られるように、模型飛行機を作製し、飛行させるのは、「明日の航空日本を担う」ための動機付けであった。

児童に「明日の航空日本を担ふ意気込」を喚起させる大人の目論見は、既に昭和十二年から始っていた。

私たちの社では愛国航空週間の催されたのを記念し、全国の少女に航空の知識を広くするために、帝国飛行協会と共同主催で『全日本少女模型飛行競技大会』を開くことになりました。

これは東京、大阪、名古屋、広島、福岡、仙台、札幌の七大都市で地方大会を行ひ、優勝者二名つつ東京に集り、全国大会に技を競はうとするのです。

これは、「東日小学生新聞」の昭和十二年六月二日(第二一五号)一面の記事である。ここにいう「帝国飛行協会」は、大正二年(一九一三)に発足し、昭和十五年(一九四〇)に「大日本飛行協会」に改組された。

すなわち、少年少女に模型飛行機を作らせ、飛ばさせるのは、「航空の知識を広くするため」から、時間の経過と共に、「明日の航空日本を担う」との意識を児童に醸成していくことが主眼になっていくのである。

3 「雪の夜」(埼玉県用土校六年女子、一月二十三日)は、次のような作品。

雪がちら／＼ 降出した夜、

遅く回覧板が 回つて来た。

雪の中を さく／＼と、

誰も通らない雪道に

前の家へ行く。

御苦労さん、お世話様。

をばさんに 渡して帰る。

雪の竹やぶ、トンネルのやうだ。

この作品の時局柄は、「回覧板」。「回覧板」は、現在でも自治体の広報として地域で一定の役割を果たしているが、「隣組の歌」(岡本一平作詞・昭和十五年六月)にも、次のように詠いこまれた。

とんとんとんからりと隣組

格子をあければ顔なじみ

まわしてちようだい回覧板

知らせられたり知らせたり

この「回覧板」が回るのが「隣組」である。昭和十四年(一九三九)八月、内務省通牒「家庭防空隣保組織要綱」によって、十戸内外を単位として地域の消防、灯火管制、警報伝達、防護の任にあたることとされ、翌十五年(一九四〇)九月には、「部落会、町内会、隣保班、市町村常会整備要綱」によって、町内会、隣保班などが制度化され、行政機関の補助的役割を果たすこととなった。

部落会・町内会等の組織は、一つには国民を地域的に組織化し、各々その日常生活に於て国家に奉公を全うせしめる組織であり、この意味に於ては部落会・町内会は万民翼賛の国民組織の地域的基底をなすものといふことが出来る。

右は、内務省「部落会・町内会等の整備について」(「週報」第二一二号、昭和十五年十月三十日)の一節であるが、「部落会・町内会」

を構成する最小の単位が「隣組」であり、「隣組」の機能の一つが「回覧板」による情報伝達であり、お隣が何をしているかを覗く機会でもあった。

4 「地下鉄道」(東京市大森区東調布第二校五年男子、二月十五日)は、地下鉄の「車内はさうとうこんで来た。後を向くと軍人さんのぐわいたうが、僕の顔をなでた」の一節が、戦時下ということ。地下鉄の混雑の中で「軍人」と隣り合わせた「僕」。「僕」の日常生活に「軍人」が隣り合わせているのが、この時代であった。なお、2 「模型飛行機」の作者と同じ在籍校学年であるが、別人の作品。

5 「あゆみ」(秋田県能代市向能代校六年女子、二月十六日)は、次のような作品。

六年の最後の

「あゆみ」の文集、

お嫁人の時、

満洲へ

もつて行くんだ。

六年の卒業記念の文集であろうが、この女子児童の嫁入り先が「満洲」と決まっているかのような表現である。

東村山校に一千名の

興亜少女隊結成

“大陸へ”の猛訓練を続ける

東京府下東村山校に一千名の興亜少女隊が結成されました。これは紀元二千六百年の記念事業で、女生徒全部が隊員となつてゐます。将来大陸へどしどし出掛けて、新東亜建設に健気な腕をふるわせるのが目的です。そのため校庭裏の農園に日の丸兵舎を建設して、大陸開拓の訓練を行ふほか、通学区毎にも少女隊を組織して、各学級の受持先生方が小訓練をする予定で、少女達の意気込も大したものです。

「東日小学生新聞」昭和十五年三月十二日(第一〇八〇号)二面に

「戦時下における児童文化」について(その一五)

掲載された記事であるが、男子生徒の満蒙開拓義勇軍に対応するかのような企画である。

同年八月三十一日(第二二二八号)二面では、「芳賀郡三校の少女拓務訓練」の見出しで、「少女隊の炊事訓練」の写真を添えて、次のように掲載した。

栃木県芳賀郡の真岡、山内、山前の三尋高校では、二十八日から三日間、全国にさきがける興亜少女隊合宿拓務訓練を行ひました。将来大陸で興亜のお仕事に活躍出来る、心身共に堅固な立派な少女になるためのお稽古で、各校の高等科二年から選ばれた六十名の隊員達は、お米六合、馬鈴薯二百匁(百五十グラム)、きゅうり等を持つて集り、麦五割の混食炊事をはじめ、昼は武道、作業、遊戯、勤労奉仕、夜は静座や映画、座談会等の日課です。

この記事は、「全国にさきがける興亜少女隊合宿拓務訓練」を報じたもので、「少女隊の炊事訓練」の写真を添えられていることから、その合宿訓練の主眼が、少女に炊事訓練を施すことにあることが推測され、家事を担うものとしての訓練であった。

「満洲開拓事業の進展」(週報)第二二四号、昭和十六年一月二十二日)において拓務省拓北局は、「開拓民の大量入植に伴つて、良い配偶者の大陸進出は緊急の問題」と指摘し、「高等小学女生徒の興亜少女隊の運動は、将来この問題に貢献するところ大なるものがあろう」と期待した。

「満洲へ」「お嫁人」は、予定された将来とも取れるが、満洲開拓事業における「良い配偶者の大陸進出」が「緊急の問題」であった。

6 「雨」(東京市芝区南海校三年男子、三月十九日)は、次のような作品。

雨が降る、とてもきれいだ。

へいたいおくりの かさのむれ、

むかふの 家々の屋根、

雨にあふられて、ぼんやりしてゐる。

「戦時下」は、言うまでもなく「へいたいおくり」。雨の中、出征の見送りである。出征の見送りは、「遺骨迎へ」とともに、児童の役割である。出征に「遺骨迎へ」に、教師の引率により児童が戦争に向きあうことになる。

第一四半期の「詩」作品は、九六作品。この内、作品内容に「戦時下」色に見えるのは、六作品であり、それ以外の九〇作品は「戦時下」を内容とするものではなかった。

第一四半期の季節柄の作品には、次のような作品があった。

山茶花の花、

薄赤い花びら、

一つ二つ、

ひらく／＼落ちる。

時々花粉がにほふ。

「山茶花」(一月十日・金、第一三三九号)、静岡県横須賀校六年男子の作品である。山茶花が咲くと冬だ。その山茶花の花びらが散り始めた。花粉も飛んで、冬が深まったということか。作者は、視覚と嗅覚で季節を捉えて見せた。

田のそば通つた。

大空が、

田にうつつてる。

大空の中を、

私はあるいてる。

「大空」(一月二十一日・火、第一三四八号)、千葉県竹岡校五年女子の作品である。畦道を歩くと大空を歩いているようだった。水を張った田に、大空が写っていたからだ。房総半島では春が早い。田に水が張られたのは農作業の準備か。

母と寒い畠で、麦の土かぶせ、

網のじよれんで ふるふ。

小さい草が 埋つてしまふ。

曲つた青い 麦の芽が、

すぐ独りで ピンとする。

後さりの 母が早い。

役場の窓に射す 夕日の強い反射。

「土かぶせ」(二月六日・木、第一三六二号)、静岡県横須賀校高二女子の作品である。麦は、晩秋から春の間に、何度か麦踏と土入れを施す。根をしっかりと張らせることで収穫量の増産を願うことだ。高等科二年の女子は、農作業の立派な労働力である。夕日が射す寒い夕方、母と二人で麦に土を入れる。後ずさりしながら、網のじよれんで土を掬い麦の上で篩う。慣れている母は、仕事が速い。私はたちまちおいていかれた。母と娘の寒の農作業に、父の姿は見えないようだ。

今朝もお庭を のぞいて見ると、

庭一ぱいに霜柱、ふむとざく。

土をよけると、一めんにまつ白。

どこをふんでも、ざく／＼、

音をたてて たふれます。

「霜柱」(二月十九日・水、第一三三三三号)、東京女子高等師範附属校二年女子の作品である。庭には、「今朝も」霜柱が立っている。踏んでみるとざくざくと音をたてる。土をどけてみると、水の柱がびっしり立っている。また、踏んでみた。ざくざくとまた、音をたてる。冬の朝の楽しみだ。

早春 (秋田県能代市向能代校六年女子)

春先だ。

軒下の雪がとけて、細い一筋の糸になり

ちよろ／＼道端へ、流れてゐる。

太陽に光つてゐる。

早春の香が してくる。

早春（茨城県枝川校高二男子）

朝もやがかゝつて、

梅の花が ぼんやり見える。

遠く筑波山の 雄姿が目に映る。

土手の草、 若芽が萌えて、

我が足は 柔かなる土を踏む。

両作品とも三月十五日（土・第一三九四号）に掲載された。それぞれ「早春」を内容とするが、住まいによる「早春」の違いが描かれている。秋田の「早春」が雪どけなら、茨城の「早春」は、朝もやである。秋田の雪どけは「一筋の糸」であるが、茨城では「若芽が萌え」、土は「柔か」だ。

第一四半期、児童は、視覚や触覚や嗅覚によって、季節の花に、自然に向き合い、身の回りの自然を、日常生活での農作業を作品化したのは、これまでと同様であった。

三 昭和十六年第二四半期における「詩」

第二四半期（四月～六月）に掲載された「詩」は八二作品。この内、作品内容に「戦時下」色に見えるのは、次の九作品であり、掲載作品に占める掲載率は約一一・〇％となる。

7 「宿宮」

（神奈川県横浜市保土谷帷子校三年男子、四月六日・日、第一四二二号）

8 「一年生」

（茨城県日立市駒王校四年男子、五月一日・木、第一四三三号）

9 「長刀」

（茨城県日立市駒王校五年女子、五月二十一日・木、第一四五〇号）

10 「おべんたう」

「戦時下における児童文化」について（その一五）

11 「ウマノ入宮」
（神奈川県川崎市幸町校五年男子、六月一日・日、第一四六〇号）

12 「帰つて来た兄」
（東京府下潤徳校三年男子、六月三日・火、第一四六一号）

13 「探照灯」
（静岡県静岡市森下校四年男子、六月十四日・土、第一四七一号）

14 「へいたいさん」
（茨城県日立市駒王校三年男子、六月二十日・金、第一四七六号）

15 「たうゑ」
（千葉県船橋市法田校二年女子、六月二十九日・日、第一四八四号）

7 「宿宮」（神奈川県横浜市保土谷帷子校三年男子、四月六日）は、次のような作品。

家に泊った部隊長、

おひげののびた 部隊長、

丈が高く でつぶりと、

指揮刀さげた そのすがた、

ほんとに勇ましい。

兵隊さんは戦車隊、

僕は戦車を見に 行つた。

強くたくましい そのすがた、

広い野原いつばいに ほんとに勇ましい。

出発の時が来た、

つき〜出て来る 戦車、

ごう〜地響 たててゐる。

どれもこれも お城のやうだ、

僕は夢中で 見とれてゐた。

戦車隊の部隊長が、「僕」の家に泊まり、野原に集結した戦車を見

に行ったという内容である。戦地への移動途中か、あるいは演習先への移動かは不明だが、戦車は、児童の生活圏に入り込み、「僕」は、「じょうく地響たててる」戦車に「夢中で見とれてゐた」。

軍隊が、民間の住宅に「宿営」する作品は、これまでも見られた。また、成城学園初等学校四年生が昭和十七年二月二十七日に刊行した綴り方集『栢』に収録された女子の作品、「兵隊さんさよなら」に次の一節がある。

八月四日の夜、家に泊つてゐた兵隊さん四人が戦地にたつので、よるおそくまであそんでゐました。夕方早く兵隊さん達は、お風呂に入つて、早く夕御飯を食べてしまひました。私達も早くお風呂に入つて夕御飯をたべました。

「兵隊さん」の出発は、夜中の十二時。それまで起きているのは、出発を見送るためだ。泊まった「兵隊さん」の「お母様」が見送りに来たのか、宿泊のお礼に来て、「長い間お世話さまでした」と挨拶する一節もある。この「兵隊さん」たちは幾日も滞在したということであろう。この綴り方の「私達」も、戦車の地響きこそないものの、「大ぜいの兵隊さんたち」が「きれいに並んで」、「さようなら」と挨拶して出発していくのを見送った。「宿営」の「僕」も、この「私達」も将に「戦時下」の日常を送っていることになる。

8 「一年生」(茨城県日立市駒王校四年男子、五月一日)の前半に、次のような一節がある。

ぼくらの となりぐみに
今年一年生が 二人はいつた。
どちらも元気だ。

学校へいくのが すきだと見えて、
かけるやうに あるいて行く。

四年生が一年生をあたたく見守っている光景ではあるが、その一年生は、「ぼくらのとなりぐみに」入ったのである。「となりぐみ」とは、児童の「隣組」ということであろうが、「東日小学生新聞」は、

昭和十五年七月十九日(金・第一一九一号)に次のような記事を掲載した。

少国民も新体制へ
児童のとなり組

東京府田無校の大意気込

小学生ばかりの隣組が東京府田無校に新しく生れました。先生と生徒とは、学校ばかりでなく、お家へ帰つてからでも、いつも何かの時の相談に、かけつけるやうでなくてはいけない。お友だち同士も隣近所で力を合せて、銃後の日本大丈夫といふ意気込が必要素だといふので、田無校では児童隣組指導班制度を実行して、好成績をあげてゐます。

この「児童隣組」は、「夏休中の学校からの通知や、連絡、勤労奉仕」、学習会や修養会にも教えあつて共々に頼りになる癖をつけようとの目的であり、「この隣組児童班が大人の隣組のお手本になるやうに、力を合せて一団となつてよく働き、よく遊ぶ」ので校長先生も喜んでゐると結ぶ。

児童隣組は、学校からの伝達や勤労奉仕の単位とする児童の組織化であつたが、「子供隣組」とも呼ばれた。「東日小学生新聞」でも、その結成を昭和十五年十月八日(火・第一二六〇号)に、次のように報じた。

矢来町に子供隣組

お湯屋を常会場に申合せ六ヶ条

隣組は大人ばかりには限るまいといふので、東京市牛込区矢来町に六日隣組子供会が出来ました。

この「子供隣組」の会員は、「町内に住む六つから十四までの子供に限り、尋常六年生と高等科生徒が世話人」で、次の「六箇条の申合せ」を決めた。

- 一、朝おきたら、おうちの人に「あいさつ」させよう。
- 一、途中でも町内の子供は「あいさつ」させよう。

一、町内のおとなにもごあいさつさせよう。

一、落書きやいたづらはやめませう。

一、子供のけんくわはとめませう。

一、道路や下水はきれいにさせよう。

矢来町の「子供隣組」は、「町会長」が「万事の世話をし」たもので、大人による子供の日常生活の躰けが目的のようである。

3 「雪の夜」では、児童が雪の中を隣に「回覧板」を回しに行ったが、その回覧板が回るのが、「隣組」であった。「子供隣組」は、そうした大人の「隣組」を子供達にまで組織させ、加入させることによって地域の子供社会の組織化を図った。

9 「長刀」(茨城県日立市駒王校五年女子、五月二十一日)は、次のような作品。

月曜日の六時間目だ

長刀の練習、

「えい。」

みんな元気な声だ。

私もまけないで

大きな声を出した。

長刀を振上げる度に

体があつくなる、

顔もぼか〜、

ほてつてくる。

女子児童の体育の時間に、薙刀が取り入れられたのは、昭和十四年五月(一九三九)の小学校武道要目の制定であったが、「東日小学生新聞」は、同年八月十日(木・第八九八号)の「夏の日記」に、東京市杉並区第十校五年女子の「綴方」作品、「長刀の日」を掲載した。

今日は一、三、五年の学校へ行く日である。今度来る時は鉢巻、手拭、運動の用意をして来いと言ふ言葉に気づいて見ると、今日は長刀をやる日である。勇んで学校へ来た。間もなく「長刀の用

「戦時下における児童文化」について(その一五)

意」の声も終るか終らないうち、「わあー」と喜ぶ声。胸をたたく音。皆長刀の用意して相川先生から習った。

夏休みの登校日に、「長刀」の練習があったということであるが、「長刀」は、女子児童の心身鍛錬であった。

氏家校上級女生徒の

頼もしき長刀体操

栃木県氏家校では、興亜少女の心身鍛錬にと、六年生以上の女生徒に長刀体操を教へて居ります。師走の寒空もなんのその、パンツと運動シャツ一枚の薄着で、きりつと鉢巻をして校庭におり立つた女生徒は、エイツ、ヤツ、オツの気合も勇ましく、六尺余の木長刀を縦横、左右にふり回す有様は、本当にたのしい限りです。

「東日小学生新聞」昭和十五年十二月十四日(土・第一三一八号)の記事である。「師走の寒空」の下、「木長刀」を振りかぶった多数の女子児童の写真も掲載され、「頼もしき長刀」振りを伝えている。

年が改まり、「少國民新聞」と改題された十六年一月二十四日(金・第一三五一号)には、東京市中野区桃園第四校での「霜を踏んで寒稽古」の記事が掲載された。

寒稽古は先づ宮城並びに皇大神宮遥拝、黙禱に次いで、明治天皇の御製「真心をこめてきたひし太刀こそは乱れぬ国のまもりなりけれ」を奉唱し、校長先生の激励のことがあったのち、「私共は天皇陛下の赤子であります。至誠奉公、明朗和親以つて負荷(になふ事)の重任を全うすべく努力いたします」と宣誓をして肌刺す寒気をもとめせず、剣道に、柔道に、薙刀にと一斉に熱と力の行がはじまるのです。

男子の剣道、女子の薙刀の写真を添えた「男子も女子も力一杯 たのしい桃園第四校」の後半の記事である。寒稽古の期間は、一月二十日から二十五日までで、五、六年生男女児童四百八十余名。時間は、授業が始まる前の七時から八時までだが、その一時間も前から稽古に

励む児童を紹介している。「校庭を道場」とする寒稽古は、明治天皇の御製をその根拠とし、「天皇陛下の赤子」としての「大任」を担うための「努力」とされたことが見えてくる記事である。

東京中野が「霜を踏んで」の寒稽古であれば、「日本の屋根」と言はれて空気も凍るやうな「長野市後町校では、「凍りつく校庭で素足の寒稽古」である。

まだうす明るい午前六時に起きて、凍りつく校庭の土を素足で踏んで、太鼓の音に合はせながら「エイツ、ヤツ」と掛声も勇ましく、男子は剣術、女子は長刀の寒稽古をしてゐます。昔から伝はつてゐる武芸の中から、尊い日本精神を養ふのです」と、松本校長先生の言はれる通り、剣を通し、長刀を通し、少国民の心や身体が、たくましく鍛へ上げられてゐます。

「少国民新聞」昭和十六年一月三十一日（金・第一三五七号）の記事であるが、古来の武芸から「尊い日本精神を養ふ」との目的は、四月からの「国民学校」に設置となる「体錬科武道」の教育目的に叶うものであった。

作品9「長刀」は五月二十一日の掲載であり、この国民学校では、「長刀」が「月曜日の六時間目」に正課として行なわれていることが推測できるが、国民学校では、「闊達剛健なる心身と献身奉公の実践力」を養う為に「体錬科」が設定され、「体錬科」には、「武道・体操」がおかれた。

体錬科に体錬科武道を置き、体錬科体操と相俟つて心身を鍛錬し我が国伝来の武道の精神を涵養せしめることとなり、なほ体錬科体操の教材に衛生が加へられた。

文部省「国民学校制の解説」（週報）第二二三号、昭和十六年一月十五日号）における「科目の名称の変化その他」の一節である。

「長刀」は、「真心をこめてきたひし太刀こそは乱れぬ国のまもりなりけれ」の精神の下、女子児童における「体錬科武道」として、心身鍛錬のみならず、「我が国伝来の武道の精神」の涵養を担ったという

ことである。

10「おべんたう」（神奈川県川崎市幸町校五年男子、六月一日）は、次のような作品。

えんだいに こしかけて、

おべんたうをたべる。

ぼくのは ひの丸べんたうだ。

中には おすしの人もゐる。

みんなうまさうに たべてゐる。

ほんたうに みんなうまさうだ。

「ひの丸べんたう」は、弁当箱のご飯の真中に梅干しだけ入れたもので、今日の遠足のお昼だ。昭和十四年五月十九日（金・第八二七号）の「綴方」作品の「遠足」にも、「背中にしよつて居るのは、ありがたい日の丸べんたうです」の一文が見えたが、作品10「おべんたう」では、「ひの丸べんたう」以外に「おすしの人も」いたことになる。

昭和十三年十一月二十六日（土・第六七九号）の「詩」作品、「日の丸弁当」では、「明日は誰も日の丸弁当と、朝会で校長先生がおつしやつた」の一文があり、「日の丸弁当」が校長の指示であったが、10「おべんたう」からは、遠足の昼食が「ひの丸べんたう」と強制されたものではなく、選択性があったということが見えてくる作品だ。

11「ウマノ入営」（東京府下潤徳校三年男子、六月三日）は、次のような作品。

ハイシ〜、

オウマガ トホル。

オウマノ カケゴエ

パカ〜ヒン〜

イサマシク、

オウマモ センチヘ

行キマスカ。

日ノマル ムネニ

ヒラ／＼サセテ、
ケフハ オウマノ

入営ダ。

児童は、人間の入営や出征のみでなく、軍馬「入営」の見送りにも刈り出されていたということである。

12 「帰つて来た兄」(神奈川県川崎市柿生校高一男子、六月十二日)は、次のような作品。

こつ／＼と入口で くつの音、

格子をあけて、兄が入る。

にこ／＼笑つて、ゲートルを取つた。

えりにけん章が 光つてる。

兄が「帰つて来た」理由は分からないが、帰ってくることは事前に分かっていたようだ。靴の音、格子のあく音が、兄が帰ってきたことを知らせている。兄は、にこにこ笑っているが、迎える家族のにこにこ顔も作品から浮かんでくる。「けん章」がどの階級であるかは分からないが、光っている「けん章」は、弟にとっても誇らしいということ。

13 「探照灯」(静岡県静岡市森下校四年男子、六月十四日)は、次のような作品。

夜庭へ出て見たら、

探照灯が光つてた。

あ、飛行機だ。

音のする方へ、

光が近寄つて行く。

あ、見つけた。

飛行機が、

黄色く光つてる、

まぶしさうだ。

探照灯の光りの筋が夜空を移動し、飛行機の爆音方向と光りの筋が

「戦時下における児童文化」について(その一五)

交差し、飛行機を捉らえるまでを眺めていた。作者の児童には、この光景に直面しての驚きはなかったようだ。予定されていた夜間の防空訓練ということか。訓練であったとしても、紛れもなく、戦時下ゆえの訓練であった。

14 「へいたいさん」(茨城県日立市駒王校三年男子、六月二十日)は、次のような作品。

つりをしてゐると、ごうつといふ 音がした。

あ、汽車だ。

鉄橋の上を通る。

へいたいさんの かほが見えた。

ぼくは手をあげて ばんざい といつた。

へいたいさんは わらいながら

しつけないをして ぼくの方を見る。

ぼくは、ばんざいをした。

釣りをしていた「ぼく」は、鉄橋を渡っていく汽車の中に「兵隊さん」を見つて、「ぼく」が万歳をすると、「ぼく」の万歳に気付いた「へいたいさん」が、「ぼく」に「しつけない」をしてくれた。この「へいたいさん」は、どんな「へいたいさん」か不明である。個人なのか、一両全部なのか、一列車すべてが「へいたいさん」なのか。一人の「へいたいさん」を見つけて万歳をするということも考えにくい。移動していく大勢の「へいたいさん」を見送ったということか。なお、「しつけない」は、敬礼のことか。

15 「たうゑ」(千葉県船橋市法田校二年女子、六月二十九日)は、次のような作品。

きのふわわたしは、

たうゑをしました。

おとうさんの

あしに、

ひるがゐたので、

びつくりしました。

前稿の昭和十六年の「俳句」、「苗代田ここにあすこに奉仕隊」（埼玉県所沢校高二男子、六月七日・土、第一四六五号）の検討に際し、「食糧の増産」のための勤労奉仕であることを指摘し、「少國民新聞」の昭和十六年一月十六日（木・第一三四四号）を引用しておいた。前々稿の「綴方」でも検討したが、この時期、農繁期における勤労奉仕が児童にも求められるところとなった。

大政翼賛会では十四日、全国道府県の農務課長や農会幹事、衛生課長をまねき、農林、文部、厚生各省からも関係局長が出席して、戦時食糧確保協議会を開きました。その結果、手不足で米や雑穀の増産が思ふやうに行かぬ農村へ、今年からは田植の五、六月ごろと、とりいれ時の十月など農家の急がしい時、四年生以上の全小学生徒をはじめ、中等学校生徒、専門学校生徒、大学生を、授業を休ませ、本式に農村へ手伝ひに出動させることになりました。

「食糧の増産」のための勤労奉仕は、「四年生以上の全小学生徒」が対象であり、15「たうゑ」の児童は二年生で対象外ということになりそうであるが、農村へ勤労奉仕に向かうのは、自宅が農家ではない児童生徒であり、自宅が農家の児童生徒は、言うまでもなく自宅の農作業にあたることになる。

第二四半期の「詩」作品は、八二作品。この内、作品内容に「戦時下」色に見えるのは、九作品であり、それ以外の七三作品は「戦時下」を内容とするものではなかった。

第二四半期の季節柄の作品には、次のような作品があった。

春（静岡市森下校五年女子）

暖かい風が、すーつと気持ち良く
吹いてくる。

緑の百合の芽が、大分大きくなった。
青木の葉がつや／＼美しく光つてゐる。

山椒、ぐみの木。

日毎、日毎 伸びて行く木の芽。

春の日が暖かに 射してゐる。

猫柳（北海道月寒校高二男子）

川ばたの猫柳、ふつくりと、

ふくらんで、とてもぬくさうだ。

真球の色のやうに、ぎら／＼と光る毛、

見れば見るほど、むく／＼と、

ふくらんで、くるやうだ。

「春」は、四月三日（木・第一四一〇号）、「猫柳」は、四月二十三日（水・第一四二六号）に掲載された。それぞれの「春」を内容とするが、住まいによる「春」の違いが描かれている。

静岡の「春」は、吹く風も暖かい。百合の芽も土から伸び、常緑の青木だが、つやつやと光り、日毎に春が進んでいく。

北海道の「春」は、「猫柳」の蕾が教えてくれる。風がまだ冷たいのか、その蕾が「ぬくさう」に見える。でも、春はやって来る。猫柳の「毛」は光り、「むく／＼とふくらんでくるやうだ」。

雨の日（新潟県加茂校高一女子）

朝から煙のやうな 雨が降っていてゐる。

さびしい日だ。

どこからか聞える 雀のさへづり。

ふと見ると、柿の小枝の 小雀が二羽、

さびしさうに ないてゐる。

雨はまだやまない、

早くお家へ、帰るとよいのに。

雨（神奈川県川崎市幸町校五年女子）

雨がしとくく降つてゐる。

雨にぬれて、青葉がきら／＼

光つてゐる。

風にふかれて、四方へ動く。

「雨の日」は、六月八日（日・第一四六六号）、「雨」は、六月二十四日（火・第一四七九号）に掲載された。

「雨の日」では、雨降りのさびしさが「柿の小枝」の「小雀が二羽のさえずりに象徴され、作者は、「早くお家へ帰るとよいのに」と、「小雀」を気遣う。

「雨」では、雨にきらきら光っている青葉を作者は見つめている。強い風が吹いてでもきたのか、青葉は「四方へ動く」。

前者は、雨を心象風景として表現し、後者は、見えたままを写し取って見せた。「高一」と「五年」の年齢差によるものか。

第二四半期にあっても、児童は、視覚や触覚によって、季節に、自然に向き合い、また、日常生活を作品化したのは、これまでと同様であった。

三 昭和十六年第三四半期における「詩」

第三四半期（七月～九月）に掲載された「詩」は九八作品。この内、作品内容に「戦時下」色に見えるのは、次の一〇作品であり、掲載作品に占める掲載率は約一〇・二％となる。

- 16 「裸体操」（岩手県大槌校高一男子、七月一日・火、第一四八五号）
17 「足」（東京市蒲田区矢口校三年男子、七月八日・火、第一四九一号）

「戦時下における児童文化」について（その一五）

- 18 「れんげ草」（茨城県豊郷校五年女子、七月九日・水、第一四九二号）
19 「作業」（神奈川県川崎市幸町校五年男子、七月十六日・水、第一四九八号）

- 20 「飛行機」（宮城県若柳校五年男子、七月二十四日・木、第一五〇五号）

- 21 「働く人」（福島県小高小高四年男子、七月二十七日・日、第一五〇八号）

- 22 「兵たいごっこ」（茨城県日立市駒王校四年男子、七月二十九日・火、第一五〇九号）

- 23 「行進」（神奈川県川崎市幸町校六年男子、八月九日・土、第一五一九号）

- 24 「雨」（岩手県大槌校高一男子、八月十二日・火、第一五二一号）

- 25 「少國民新聞」（神奈川県川崎市幸町校五年男子、八月十九日・火、第一五二七号）

作品。16 「裸体操」（岩手県大槌校高一男子、七月一日）は、次のような

服もシャツも 皆ぬいで、裸体操だ。

みんな丈夫さうだ。

この体が今に、立派な兵隊に なるのか。

「気をつけ。」

ひきしまつた みんなの顔。

裸体操は「立派な兵隊になる」ための鍛錬ということだ。「服もシャツも皆ぬいで」の裸体操は、季節柄、心地よくもありそうだ。

「このくらの寒さに負けてなるものか。」と、千葉県船橋尋高
校第三校舎では、この頃、毎日お昼休みには、先生も児童も、元
氣一ぱいで音楽に合はせて乾布摩擦を続けてゐます。おかげで千
余人の全校児童中、風邪ひきはめつたにありません。力一ぱい乾
いた手拭でこすつて、桜色に、ぼかぼかにあたゝまつたところで、

今度は一せいに裸体操です。好成绩との評判をきいて、近く文部省から本間体育係が、視察に見える筈であります。

「少國民新聞」昭和十六年二月一日（土・第一三五八号）の「寒風に鍛へる乾布摩擦」が、写真と共に掲載された。写真からは判然としないが、校舎内での裸体操であろうか。それにしても、一番寒さが厳しい季節での裸体操である。

東京府南多摩郡由井村小比企国民学校では、梅雨晴れの日をえらんで「はだか、はだし体操」を行つてゐます。ヨイコドモであると同時に、これからの日本を背負つて行くにはツヨイコドモでなければなりません。この村はお医者さんの居ない村ですが、児童たちはとても健康です。

「少國民新聞」昭和十六年六月二十日（金・第一四七六号）に掲載された「みんなツヨイコドモに」である。この記事も写真と共に掲載され、男子児童の後には女子児童が写っている。無医村ということから健康増進のための裸体操ともいえるが、「これからの日本を背負つて行くにはツヨイコドモでなければなりません」のであり、男子の場合、「これからの日本を背負つて行く」とは、「立派な兵隊」になることとであり、裸体操はそのための鍛錬の一つであった。

17「足」（東京市蒲田區矢口校三年男子、七月八日）は、次のような作品。

今日せんちから 三年ぶりで、
かへつた兄さんが、せんちのおはなしを
たくさん してくれた。
クリークや谷を あるいたんだよ、この足で。
兄さんが 足を見せて下さつた。
なんと八千五百キロ あるいたんだよ、
この足で。
ぼくたちみんなで 聞いてゐた。
みんなで手をうち、ほめました。

兄が三年ぶりで戦地から帰った。クリークや谷を歩き、八千五百キロも歩いたという兄の足。その距離を実感できなくても、長大さに「ぼくたちみんな」は思いを馳せたということ。

18「れんげ草」（茨城県豊郷校五年女子、七月九日）は、「赤紫のれんげ草、遠い戦地の兵隊さんへ、送つてあげたいな」という作品。「蜂やてふく」が遊んでる「れんげ草が「一面花ざかり」の田んぼ。児童の平穩な日常は、「戦地の兵隊さん」へと続いていたということ。

19「作業」（神奈川県川崎市幸町校五年男子、七月十六日）は、次のような作品。

つくゑをはこぶもの まどをふくもの、
作業の時間だ。

だれも はなしをしない。

つくゑを はこぶ音だけが、

きこえる。

清掃の時間は、「作業の時間」となった。集団活動の位置づけの「作業」では、「だれもはなしをしない。つくゑをはこぶ音だけがきこえる」のであり、児童が一体となり、団体行動として「作業」への集中が求められたということだ。

20「飛行機」（宮城県若柳校五年男子、七月二十四日）は次のような作品。

ごうつと プロペラの音。
すぐ上に 飛行機三機、
へんたいで とんである。
時々銀翼が ぴかりと光る、
日の丸が くつきりと
ういてある。
児童の頭の上を、編隊を組んだ「飛行機」が、飛んで行く。「日の丸がくつきりと」浮いて見えるほどの高さだ。訓練飛行であろうが、戦争と児童との距離は近いということだ。

21 「働く人」(福島県小高校四年男子、七月二十七日)は、次のような作品。

じり／＼と、照る太陽の下で

麦刈だ。

あついなあ、はだかで刈つてゐる子供も、

お昼だ、お昼だ、

はしつて行く。

第一四半期の作品、15 「たうゑ」では、自宅の田植えを手伝っていたが、ここでは「麦刈」。作者の児童は四年生。作者のほかにも「子供」が麦刈りをしていることになるが、「四年生以上の全小学生徒」が対象であった「食糧の増産」のための勤労奉仕ということか。

22 「兵たいごっこ」(茨城県日立市駒王校四年男子、七月二十九日)は、次のような作品。

青木君が、顔にひげをかいて

「兵たいごっこやつべ」といった。

みんなが「やつべ」といった。

はたけの方へ、棒を持つて、

かけて行くと、

犬が「わんわん」とほえてゐる。

みんな「おつかね」といつて

にげて行つてしまつた。

「兵たい」は、犬に吠えられ逃げ散つた。何とも意気地のない「兵たい」だが、何とも微笑ましい光景だ。児童は「戦時下」も遊びにしまつてしまふということだ。

23 「行進」(神奈川県川崎市幸町校六年男子、八月九日)は、次のような作品。

全校揃つて行進だ、

元気に 一二、一二と

歩いてる。

「戦時下における児童文化」について(その一五)

一年生も僕達と 一しよになつて、
行進だ。

夏の暑さに

ひるまずに、シャツ一枚で、

行進だ。

「少国民新聞」は、昭和十六年七月三十一日(木・第一五一号)に、次のような記事を載せた。

いよ／＼明日から

夏の錬成です

木陰で、空地で、海、山で

さあ、強く鍛へませう

毎年より十日おくれでいよ／＼明八月一日から国民学校も中等学校も、夏の錬成に入ります。昨年までの暑中休みですが、今年は授業がないだけで、錬成は休みません。厚生省、文部省では明日から全国一せいに、国民心身鍛錬運動を行ひ、歩け、泳げ、体操せよ」と呼びかけます。

厚生省は、「時局下における国民心身鍛錬運動」(「週報」第二五二号、昭和十六年八月六日号)において、次のように前置きを掲げた。

厚生省と文部省主催の国民心身鍛錬運動が例年通り、八月一日から二十日まで全国に実施されます。この運動のねらひはどこにあるか、どんな方法で心身を鍛錬すればよいか、この一文をよく読んで御協力ください!

本文は、「心身鍛錬は国民の義務」から始め、この運動の必要性を説いた。

国際情勢は刻一刻と緊迫の度を加へてゐますが、この動乱の嵐の中に大東亜の共栄圏を確立し、高度国防国家を建設してゆくためには、量的質的な人的資源の強化と確保が必要であることはいふまでもありません。

ところが国民体力の現勢をみると、事変以来出生率低下の傾向

が現はれてきてをり、壮丁の体力も徴兵検査の結果をみると低下の傾向を示してゐます。更に一般国民の体力も、殊に都市青少年の体質が悪化し、誠に憂ふべき状態です。(略)

家庭教育も、学校教育も、必ず兵役に甲種で合格するやうな身体を養成することを目標とし、また、青少年を使つてゐる会社や工場商店などでも、皇軍としての基礎体力を養成するといふことに目標をおいて、青少年達の体力の錬成を指導しなくてはなりません。

23 「行進」は、「授業がないだけで、錬成は休みません」に沿った体力養成の「国民心身鍛錬運動」であり、「皇軍としての基礎体力を養成する」する鍛錬が、一年生から実行されたということである。

24 「雨」(岩手県大槌校高一男子、八月十二日)は、次のような作品。

星の無い空からも、
雨がふり出して来た。

音のしない雨だ。

だけれが、

「どこまでつゞくぬかるみぞ。」

と歌つてゐる。

暗く遠い夜空だ。

「どこまでつゞくぬかるみぞ。」は、軍歌「討匪行」(作詞・関東軍参謀部・八木沼丈夫、作曲・藤原義江)の歌い出し。「だけれが」歌っているところがあるが、この軍歌の流行の一端を示すものといえようが、結びの「暗く遠い夜空だ」は、暗示的である。

25 「少國民新聞」(神奈川県川崎市幸町校五年男子、八月十九日)は、僕の「綴方」が「少國民新聞」の「支那事変記念綴方」に入選したというもの。この募集は、近衛師団と少國民新聞が共同主催で、近衛師団管下の東京、千葉、埼玉、山梨、神奈川県の一府四県から募った「聖戦四周年記念綴方」で、同新聞の十六年七月三日(木・第一四八

七号)の発表では、千四十九校から二千九十八名の応募があり、佳作入選者として児童の名前が掲載されていた。

第三四半期の「詩」作品は、九八作品。この内、作品内容に「戦時下」色が見えるのは、一〇作品であり、それ以外の八八作品は「戦時下」を内容とするものではなかった。

季節柄の作品として、第三四半期に六作品見られた「とんぼ」を題目とした作品を挙げて見る。

1 「とんぼ」(川崎市幸町校五年男子、七月二十五日・金、第一五〇六号)

垣根にとまった。

かみのやうにうすい羽。

すきとほつて光つてる。

そつとそばへよるとしつぽをあげて、

すつと屋根の方へとんで行く。

近くの垣根にとまった「むぎわらとんぼ」を、しっかり見ると羽根

は、紙のように薄く、透き通って光っていた。もっとよく見ようと近

寄ったら、「しつぽをあげて」飛んでいってしまった。観察の行き届

いた作品といえよう。

2 「とんぼ」(東京市荏原区中延校三年男子、八月九日・土、第一五一九号)

青い空に、とんぼがとんでゐる。

やねの上をとんでゐる。

うれしさうにとんでゐる。

きにとまったからとらうとしたら、ついとにげた。

屋根の上を「うれしさうに」飛んでいる「とんぼ」を見つけた。近

くの木にとまったから手を出したら、「ついとにげた」。作者には、

「とんぼ」のうれしい心が分かった。「とんぼ」も作者の捕まえようと

する気持ちが分かった。お互いの心理戦か。

3 「とんぼ」

(東京市荏原区中延校三年男子、八月十四日・木、第一五二三号)

そらを見ると、とんぼがとんでゐた。

ならんでいくやうだ。

わらふやうに、とんでゆく、

あをいそらをとんでゆく。

1の作者と同じ在籍校学年であるが、別人の作品。2では、とんぼが「うれしさうに」と捉えられたが、この「とんぼ」は、「わらふやうに」飛んで行った。実際の表情が見えたということではなく、作者の感覚が捉えた表情ということ。

4「とんぼ」(山梨県下山校三年女子、八月二十八日・木、第一五三五号)

とんぼ、とんぼ、あかとんぼ。

お庭のかきねに とまつてる。

私がくるくく 手をまはすと、

くるくく 目玉がまはる。

とらうとしたら、にげて行つた。

季節は夏から秋が近くなり、とんぼも「あかとんぼ」となった。とまった「あかとんぼ」にくるくると指を回すと、「くるくく 目玉がまはる」。手をのぼすと逃げたが、目玉が回るのを観察できるほど、「私」は冷静だ。

5「とんぼ」(宮城県細倉校五年女子、九月十四日・日、第一五五〇号)

お花に立てた竹の上、

小さいとんぼの羽根ぐるさん、

きよろくお目々で なに見てる。

お花と話をしてゐるの。

夕立来さうだ、はよかへれ、

お山のお家へ はよかへれ。

「はねぐるさん」は、翅が黒いとんぼ。作者は、とんぼと会話が出るわけではないが、とんぼの首を振る様子が「お花と話をしてゐる」ように思えたということ。夕立が来る前に、「お山のお家へはよかへ

「戦時下における児童文化」について(その一五)

れ」と作者は心配する。「はねぐるさん」は、友達だからだ。

6「とんぼ」(新潟県道上校高一男子、九月二十日・土、第一五五五号)

とんぼくるくく、目玉をまはし、

庭の八つ手の はにとまる。

でつかい目玉の とんぼの目には、

何が見えるか、用ありそう。

ついと飛んでは、またもの葉に、

さうして何やら さもうまさうに、

口をもぐくく、目をくるくくと、

ついと飛んでは、やぶ蚊をつかむ。

じっくりと「でつかい目玉のとんぼ」を観察する。八つ手の葉に、飛んでは戻ってくる。口をもぐもぐと動かし、目もくるくると回す様子を、作者はしっかりと観察している。作者の動体視力もたいしたもの。とんぼが「やぶ蚊」を口にする様子を確かに捉えていた。

以上、六作品の「とんぼ」では、視線による観察は勿論だが、児童は、心情と感情で捉えて見せた。

四 昭和十六年第四四半期における「詩」

第四四半期(十月〜十二月)に掲載された「詩」は七十二作品。この内、作品内容に「戦時下」色の見えるのは、次の六作品であり、掲載作品に占める掲載率は約六・九%となる。

26 「兵隊ごっこ」

(東京市第三寺島校三年男子、十月十七日・金、第一五七八号)

27 「グライダー」

(東京市東調布第二校六年男子、十月二十八日・火、第一五八六号)

28 「十分間掃除」

(秋田県能代市向能代校高一女子、十月三十一日・金、第一五八九号)

29 「いなごとり」

- 30 「鳩」 (山形県上ノ山校高一男子、十一月一日・土、第一五九〇号)
(北海道広尾校高二男子、十二月十七日・水、第一六二九号)
- 31 「グライダー」
(東京市荏原区中延校三年男子、十二月二十八日・木、第一六三九号)

26 「兵隊ごっこ」(東京市第三寺島校三年男子、十月十七日)は、次のような作品。

へいたいごっこを、やりました。

ぼくはぐんさうになりしました。

ひげに くさの葉 つけました。

みんなに がうれい かけました。

第三四半期、22「兵たいごっこ」でも、顔に「ひげ」をかいていた。

「ひげ」は、「がうれい」をかける指揮官という記号ということか。

27「グライダー」(東京市東調布第二校六年男子、十月二十八日)は、次のような作品。

二機のグライダー、

北から 飛んで来る、

城内の空で、ちうがへり、きりもみ、

僕ははじめて見た。

一機は低空飛行で 着陸した。

白い煙の中に 着陸した。

作者の児童は、グライダーの飛行を見学に行ったということ。大日本飛行協会が航空機への意識発揚のためにグライダーのデモンストレーションを開催したのを見学したか。

28「十分間掃除」(秋田県能代市向能代校高一女子、十月三十一日)は、次のような作品。

鐘がなった。

十二時四十五分、

十分間お掃除の 開始だ。

自分の場所に 走つて行く。
階段をどんくくと 下りて行く、
すさまじい 音がする。

「お掃除」が、「戦時下」なのではない。持場を決め、競わせるような管理的な掃除の方法が戦時下的なのである。

29「いなごとり」(山形県上ノ山校高一男子、十一月一日)は、次のような作品。

明治工場の うらの田に、

いなごが たくさんゐた。

稲刈のすんだ 田のあぜに、

たくさんゐた。

いなごは すばやくて

なか／＼ つかまへられない。

稲掛の 日なたに

とまつてゐるのは、

眠つてゐるのか、

じつとして動かない。

そつと、おさへると、

いなごは 手の中であばれた。

「少國民新聞」昭和十六年十一月九日(日・第一五九七号)に、次の記事が掲載された。

蝗を五石一斗

売上げて慰問袋

栃木県矢板校で

栃木県矢板校は、千六百名の児童を動員してこの程三日間放課後一時間蝗取りをしました。その収穫は、合計五石一斗といふ好成绩でした。その蝗は一升十二銭で、各家庭へ飛ぶ様に売れて、合計六十一円三十銭となりました。同校ではこのお金を、生徒から第一線の兵隊さんへ送る慰問袋の送料や、その他公益事業に使用

することになりました。

また、十一月十一日（火・第一五九八号）には、次のような記事がある。

蝗を六十貫

校庭で干して売出す

栃木県祖母井校では、家畜飼料とお米の増産のため、先日近くの田圃で稲の大敵蝗をとりました。たつた二時間で何と六十貫（二百十キロ）。これを熱いお湯で煮て、五十余枚のむしろにのせて、校庭一ぱいに拡げ、乾かしました。お魚の餌になるので、方々から注文が来て、どしどし売れます。今後、続けてとり、売上金で慰問袋を作らうと、張切つてゐます。

29 「いなごとり」は、個人のいなご採りなのか、二つの記事のように学校が絡んでいるのかは不明であるが、いなごが、成熟する稲穂にとって害虫であり、それを駆除することは収量に影響することは確かであり、それが売れるとなれば、いわば一石二鳥。

30 「鳩」（北海道広尾校高二男子、十二月十七日）は、次のような作品。

自習中の教室に、鳩が入りこんだ。

皆が「わあつ。」と騒いだ。

級長が「静まれつ。」といった。

鳩は低く飛んで、

前の方で 糞を落した。

皆が どつと笑った。

僕は、荒鷲の

空爆を思ひ出した。

教室に入り込んだ鳩が低く飛んで糞を落して飛び去ったことが、「荒鷲の空爆」に思い至ったというもの。写真やニュース映画での記憶があったということか。

31 「グライダー」（東京市荏原区中延校三年男子、十二月二十八日）

「戦時下における児童文化」について（その一五）

は、次のような作品。

二かいの まどから、とばしたグライダー

青い空に、二枚のつばさ。

ぴんとのびて、風にふかれ

まがつていく。

模型のグライダーを飛ばした光景が内容であり、ここには、「戦時下」色が見えないようであるが、この時期にグライダーを飛ばしていたことが、「戦時下」といえるのである。

「東日小学生新聞」昭和十四年二月八日（水・第七四一号）は、「大空を目ざす小学生 グライダー製作 月島第三校生徒の腕前」の記事を掲載した。

大空に憧れる小学生達の意気はすごく、航空機を操縦するだけではもの足りない。僕等も機体を作りませう」と京橋区月島第三高等小学校の生徒たちは、何とこの頃グライダーの組立てに一生懸命です。

ただ、月島第三校のグライダーは、初歩用であるが、「長さ五米、翼の長さ十米五〇、高さ二米一〇、機重七十五キロ」というから、30 「グライダー」のように、簡単に飛ばすことは出来ない。

30 「グライダー」の機体は「二枚のつばさ」ということであり、模型のグライダーと考えられるが、2 「模型飛行機」と同様、遊戯や娯楽ではなく、「明日の航空日本を担ふ」ための動機付けを背景とするものであった。

第四四半期の「詩」作品は、七二作品。この内、作品内容に「戦時下」色に見えるのは、六作品であり、それ以外の六六作品は「戦時下」を内容とするものではなかった。

「子牛」（岩手県大槌校高一男子、十月一日・水、第一五六四号）は、次のような作品。

子牛、親のない子牛、
さびしさうに草を
食べてゐる。

子牛、

真赤な夕焼空に
鳴いてゐる。

親牛がいたときと違って、子牛の様子が「さびしさうに」見えたのは、親牛がいない事情も分かつてのことか。子牛が夕焼空に鳴いている。親牛を慕う子牛の心情は、子牛を見つめる作者の心情だ。

「街の中」（静岡県三島西校六年女子、十一月二日・日、第一五九一
号）は、次のような作品。

夜散歩に出た、

街頭の曲り角に 玩具を売つてゐる。

空箱の中に 散らばつてゐる銅貨が、

冷たい影を 作つてゐる。

人は通つてゐるが、まだ誰も寄つて

くれないらしい。

小さい人形が 薄暗い電灯に

光つてゐるだけだ。

祭りの夜店ではない。町角の客の寄らない玩具屋で、「小さい人形が薄暗い電灯に光つてゐるだけ」の光景は、いかにも寂しい。作者は、忘れられた「小さい人形」の寂しさを汲み取つてみせた。

「空」（千葉県市川校二年女子、十一月六日・木、第一五九四号）は、次のような作品。

空はどうして あんなに

高いのだらう。

昨日とんぼ取に 行つた時、

長いもちぎをで さはつてみた。

星を取ろうとして与太郎が屋根の上で物干竿を振り回す落語がある

が、二年生の作者は、空の高さが不思議でならない。「長いもちぎを
でさはつてみた」というが、さわれたのだらうか。

「プールの水」（東京市荏原区中延校三年男子、十一月九日・日、第
一五九七号）は、次のような作品。

プールの水は、きれいだな。

青いお空が、うつつてる。

プールの水は、きれいだな。

ガラスのやうに、光つてる。

三年生の作者は、空をプールに見た。青いお空が、静かな水面に写つ
ていた。「青いお空」は、足もとにもあったということだ。

「夜の風」（千葉県船橋市法田校高一男子、十一月二十二日・土、第
一六〇八号）は、次のような作品。

風に枯葉が 落ちる音、

笠のない 電気の球が、

静かに動いて居る。

時々向かふで 話す声が、

風のやむ度に 聞えてくる。

寒さが身にしみる。

木枯しが強く吹いている。風に舞う枯葉の音が聞える。作者は、木
枯しが吹く度に静かに揺れる街灯の電球を眺めている。寒さが身にし
みると作者は言うが、冬の夕刻の寂しさが伝わってくる。

第四四半期においても、「戦時下」色を内容としない作品が圧倒的
に多く、家の牛に、人形に、空に、木枯しにと、児童は身の回りの事
象を、視覚や嗅覚によって捉え、感性を通して言語化し、表現してい
たことは、第一、二、三四半期と同様であった。

五 昭和十六年「詩」作品の概括

昭和十六年に掲載された「詩」三四八作品のうち、作品内容に「戦

時下」色に見えるのは三一作品であり、掲載率は約八・九％。

この三一作品をグループ化してみると、次のようになる。

〈児童が軍隊と直接・間接に係わっている作品〉

- 1 「遺骨迎へ」、4 「地下鉄道」、5 「あゆみ」、6 「雨」（出征）、
 - 7 「宿営」、11 「ウマノ入営」、12 「帰つて来た兄」、13 「探照灯」、
 - 14 「へいたいさん」、17 「足」、18 「れんげ草」（戦地へ送りたい）、
 - 20 「飛行機」、24 「雨」（討匪行）、27 「グライダー」、30 「鳩」
- 兵士の出征を見送る「雨」、帰還兵の「帰ってきた兄」の「足」、戦死者を迎える「遺骨迎へ」。戦地へは馬もいく「ウマノ入営」。出征・帰還・戦死である。

兵隊が自宅に泊まった「宿営」、地下鉄で軍人と背中合わせの「地下鉄」、鉄橋を渡る汽車に乗っていた兵隊を見送った「へいたいさん」。防空演習の「探照灯」、頭上を行く「飛行機」、宙返りを見た「グライダー」。児童の身近に軍隊がいる。

戦地の兵隊さんに送りたい「れんげ草」、お嫁に行く満洲に持っている「あゆみ」、雨の日に軍歌を聞く「雨」、鳩の侵入は「荒鷲」のようだった「鳩」。児童の日常は、戦時下が入り込み、戦地と続いている。

〈児童が学校生活において「戦時下」にある作品〉

- 9 「長刀」、10 「おべんたう」（日の丸弁当）、16 「裸体操」、19 「作業」（清掃）、23 「行進」、28 「十分間掃除」
- 心身鍛錬の「長刀」「裸体操」「行進」、清掃が「作業」「十分間掃除」。心身鍛錬であり、集団行動が求められた。遠足は日の丸弁当の贅沢禁止。

〈児童が勤労奉仕・食糧増産に係わっている作品〉

- 15 「たうゑ」、21 「働く人」（麦刈り）、29 「いなごとり」
- 学校から勤労奉仕に。児童は、農作業に刈りだされ、食糧増産の一

「戦時下における児童文化」について（その一五）

翼を担った。

〈児童の放課後に係わる作品〉

- 2 「模型飛行機」、22 「兵たいごっこ」、26 「兵隊ごっこ」、31 「グライダー」。
- 児童の放課後の遊びにも戦時下色が濃いついこと。

〈児童と地域社会に係わる作品〉

- 3 「雪の夜」（回覧板）、8 「一年生」（隣組）は、地域に組み込まれた児童とその家庭。

つまり、次のようなグループになる。

〈児童が軍隊と直接・間接に係わっている作品〉

〈児童が学校生活において「戦時下」にある作品〉

〈児童が勤労奉仕・食糧増産に係わっている作品〉

〈児童の放課後に係わる作品〉

〈児童と地域社会に係わる作品〉

このことは、「詩」においての「戦時下」色を持つ作品は、児童が、学校でも家庭でも、地域社会でも係わっているということである。

昭和十六年戦時下の児童文化について、これまでに、「綴方」と「俳句」について検討してきた。

前年十五年と十六年の「綴方」について、掲載数と時局柄或は「戦時下」色を持った作品の掲載率について、整理しておく、次のようになる。

「十五年」

- 第一四半期六二作品中一三（約二〇・九％）
- 第二四半期七七作品中一四（約一八・一％）
- 第三四半期八二作品中一一（約一三・四％）

第四四半期九二作品中二三（二五・〇％）
合計三二三作品中六一（約一九・五％）

「十六年」

第一四半期七六作品中一六（約二一・一％）
第二四半期八七作品中二〇（約二二・九％）
第三四半期八一作品中三一（約三八・三％）
第四四半期四六作品中二二（約四七・八％）
合計二九〇作品中六九（約二三・八％）

十五年と比較して見ると、十六年は、第一四半期から第二四半期にかけて、何れも十五年の掲載数を上回り、「戦時下」色を持った作品の掲載率についても、上昇している。

しかし、十六年の第三四半期は、掲載数では十五年第三四半期とほぼ同数ながら、「戦時下」色を持った作品の掲載率は、逆に、ほぼ倍増したことになる。これは、第三四半期に「支那事变記念綴方優等作品」の掲載が一二作品あったことによるものであった。

特に、第四四半期は、紙面構成の減少による掲載作品数の減少があるにも係わらず、「戦時下」色を持った作品の掲載率はほぼ同数であった。従って、その掲載率は上昇することになった。これは、第四四半期に「映画『航空基地』を見て」が五作品、「大東亜戦争と私の覚悟」が八作品掲載されたことによるものである。「大東亜戦争と私の覚悟」は、十二月八日に開戦となった日米英戦でのキャンペーンであった。一方、「俳句」における「戦時下」を内容とする作品率は、次のようであった。

十四年は三三三作品中三六（約一〇・八％）。
十五年は五五六作品中六四（約一一・五％）。
十六年は四一八作品中四七（約一一・二％）。

「俳句」においては、「戦時下」を内容とする作品は、三年間ほぼ一％と、同様の掲載率であり、大きな変化が見られなかったが、その

理由は、「俳句」というジャンルゆえと考えられる。

本稿の一に記したが、「東日小学生新聞」の発行された昭和十二年から十六年における「詩」作品の内容に「戦時下」色或は時局柄を内容とする作品は、次のようになる。

昭和十二年は、二六二作品中一〇（約三・八％）
昭和十三年は、三六三作品中三一（約八・五％）
昭和十四年は、三四一作品中三七（約一〇・九％）。
昭和十五年は、三四八作品中三九（約一一・二％）。
昭和十六年は、三四八作品中三一（約八・九％）。

十六年の「詩」は、掲載数が前年十五年と同じであったが、「戦時下」を内容とする作品の掲載数は八作品減少し、当然のことながら、掲載作品に対する「戦時下」を内容とする作品の掲載率も約二・三％の減少であった。

しかし、第四四半期の用紙節約による二面構成日では、十五日分で作品の掲載が無かったにも係わらず、掲載数が減少することがなかったということは、相対的に掲載数は増加傾向にあったといえよう。

一方、「戦時下」を内容とする作品の掲載率については、十六年の「綴方」が約二三・八％と十五年から四・三％増大し、「俳句」が約一・二％とほぼ同率であったことを考え合わせると、「詩」作品における減少傾向は特徴的であったといえよう。

前稿では、「綴方」と「俳句」を比較し、「俳句」では、「戦時下」を内容とする作品は、三年間ほぼ一％と同様の掲載率であり、大きな変化が見られなかったことについて、「東日小学生新聞」の時代も、「少国民新聞」になっても、時局柄に即したキャンペーンや懸賞募集が設定されたジャンルは、「綴方」と「書方」であり、「大東亜戦争と私の覚悟」といったテーマで「俳句」を作ることが出来なかったからであろうと記しておいたが、「詩」においても同様な事情であったといえよう。

（二〇〇九・一一・三〇）